



## 植物の種は、どうやってできるの

### めしべが花粉をもらって種ができる

こん虫でも、鳥やイヌなどでも、オスの遺伝子（親の体質や性質を伝えるもの）をメスにわたして、オスとメスの両方の遺伝子がいっしょになって、卵や赤ちゃんができます。ふつう、植物の種も、動物の卵や赤ちゃんと同じように、オスの花粉が、メスのめしべにわたされて（受粉という）、できます。

アブラナの花を調べると、真ん中にめしべ、そのまわりを囲んでおしべ、外側に花びらがあります。めしべの部分を、縦に切ってみると、下の方のふくらんだ部分（子房とよぶ）に、緑色の小さな丸いつぶが、2列に並んで見えます。この丸いつぶが、種になります。

受粉しないと、種にはならず、かれて落ちてしまいます。

ヘチマは、めしべの下の方の太くて長い部分が子房で、受粉してしばらくすると、どんどん子房が大きくなり、中を切ってみると、種ができはじめています。

### ほかの花の花粉をもらうくふうをしている

めしべに、同じ花のおしべの花粉がつくと、同じ遺伝子をもろうことになり、病気などにかかりやすい、悪い性質の種ができることになります。それをさけるため、アブラナなどは、めしべが先に熟し、虫によって運ばれた、ほかのアブラナの花の花粉が、つくようになっています。ぎやくに、おしべが先に熟す花もあります。（監修・矢野 亮）

